日本型アカデミック・アドバイジングの挑戦②

学生が大学での学びや将来の方向性を考え、学習計画を策定していく過程を支えることは、アカデミック・アドバイジングの重要な役割である。第2回では、履修支援も含めた学習計画の策定支援に焦点を当て、日本型アカデミック・アドバイジングの特徴と課題について取り上げる。日本アカデミック・アドバイジング協会会長であり、愛媛大学学習支援コモンズで実践に取り組む清水栄子氏に、日本における学習計画支援について紹介してもらう。

愛媛大学　清水栄子

学習計画を支えるアカデミック・アドバイジング

アカデミック・アドバイジング（以下、アドバイジング）の目的は、学生が自身の学習やキャリアの目標を設定し、その達成に向けた学習計画を策定できるよう支援することにある。こうした支援は、大学教育において重視されつつあるスチューデント・サクセスの実現とも深く関わっている。

また、その過程では、計画の進捗を確認しながら、必要に応じて見直しを行うことも重要である。こうした学習計画に基づいて履修を選択していくプロセスそのものが、アドバイジングの重要な対象となる。同じ課題を抱える学生であっても、その背景や置かれている状況は異なるため、アカデミック・アドバイザー（以下、アドバイザー）には画一的な対応ではなく、個別の状況に応じたかかわりが求められる。しかし、日本ではこうした支援を行ううえで、特有の条件がある。

短期間での履修選択

日本の大学では、入学から履修登録までの期間が短く、学生は限られた時間の中で履修科目を決定しなければならない。この特徴は、学生の学習計画の策定や意思決定のあり方に大きく影響している。

日本では、入試形態の多様化により、入学が年内に決まる学生もいれば、3月中旬以降に決まる学生もいる。そのため、オリエンテーションは3月末から4月上旬に集中して実施される。また、授業回数の確保などの制度的要請もあり、新年度開始直後の限られた期間の中で履修登録を行う必要がある。

一方、米国の大学では、入学決定後から学期開始までに一定の準備期間が設けられており、その間にオリエンテーションやアドバイジングを通じて、学習目標の検討や学習計画の策定を進めることができる。

日本では、短期間で履修科目を決定せざるを得ないため、学生は十分な検討を行うことが難しく、先輩からの情報や生活リズムが履修選択の基準になってしまうことも少なくない。このような状況のもとで、アドバイザーには、限られた時間の中で学生の意思決定を支える役割が求められている。

学習計画の策定支援

対話による目標の明確化

学生の履修選択を支援するうえで、アドバイザーが重視するのは、学生自身の学習や将来に関する目標を明確にすることである。すでに大学院進学や留学、将来の職業に関する目標を持っている学生もいる。一方で、学年にかかわらず必ずしも目標が明確ではない学生もいる。そのような学生に対して、いきなり将来の目標を聞いても、すぐに答えられるとは限らない。そこで、これまでに興味を持ったことや好きだった科目、印象に残っている経験などを手がかりにしながら、対話を通じて関心を引き出していく。

さらに、「なぜそれに興味を持ったのか」「どのような点に魅力を感じたのか」といった問いを重ねていくことで、学生が自らの興味・関心を言語化していく過程を支えることができる。このような対話は、学生が自分自身を理解し、大学での学びを自らの将来や人生と結び付けて考える機会にもなる。

対話を通じて、学習や将来に関する方向性が徐々に見えてきた段階で、その実現に向けて必要となる学びや経験を学生とともに考えていく。学習計画の策定とは、学生が自身の学びをどのように進めていくのかを考える意思決定のプロセスである。このような取組を通じて、学生は自身の学びを自らのものとして捉え、計画的に学習に取り組む姿勢を身につけていく。学習計画の策定は単に履修を決めるためのものではなく、これまでに整理した自身の興味・関心、将来の目標とどのように結びつくかという観点から判断することが重要である。

学習計画の具体化

学習計画を具体化するプロセスが、履修科目の選択である。このとき、単に履修可能な科目を選ぶのではなく、学生が自らの目標を明確にし、その実現に向けて主体的に行動する力を育む機会でもある。この意味において、学習計画の支援はスチューデント・サクセスの実現を支える重要な教育活動といえる。

履修科目を選ぶ際には、学生はカリキュラムの意味を理解しておく必要がある。大学のカリキュラムは、教育目標の達成に向けて科目が体系的に配置されており、それぞれの科目には役割がある。学生はその構造を理解することで、個々の科目を点としてではなく、学びの全体像の中で捉えることができるようになる。さらに、自らの目標とカリキュラムとの関係を踏まえて履修を選択する経験は、学生が自身の学びに責任を持ち、自ら判断する力を育むことにもつながる。

アドバイザーは、こうしたカリキュラムの意図を学生に伝えながら、履修選択の理由を言語化することを支援する。たとえば、「なぜこの科目を履修するのか」「どのような学びにつながるのか」といった問いを通じて、学生自身が選択の意味を考える機会を提供する。履修選択は単なる手続きではなく、自分自身の学習を設計するための場でもあり、このプロセスを支えることがアドバイザーの役割である。

また、学習計画は一度作成して終わるものではない。実際の学習経験や成果を振り返りながら計画を見直していくことで、学生は自らの学びを調整できるようになっていく。このような継続的な振り返りと改善のプロセスも、アドバイジングが支援する対象である。こうした経験を積み重ねることで、学生は自律設定や意思決定、自己調整など、自らの学びを主体的に進めるために必要な力を身につけていく。

学習計画支援の課題と展望

日本型アカデミック・アドバイジングでは、日本の大学制度や学生の状況を踏まえながら、限られた期間の中で学生の学習計画の策定と履修選択を支援することが求められる。この限られた時間という条件が、いくつかの課題をもたらしている。具体的には、学習目標が不明確なままで大学での学びや経験を積む場合や、計画性を欠いた履修選択が行われることがある。

また、必ずしも専門的な研修を受けた担当者が配置されているわけではないため、学生対応についても担当者によってばらつきが生じやすい。

現行の学年暦や履修登録のスケジュールを前提とする場合には、履修登録以前の段階から、カリキュラム理解や学習目標の明確化を支援する取組が求められる。加えて、専門職の数が必ずしも多くはない中で教職員が履修や学習計画を支援していくうえでは、個々の教職員に向けた研修や情報提供を行う必要がある。また、学内組織や教職員間の協力体制を整えていくことが求められる。

こうした課題に対応する一つの参考として、たとえば米国のアカデミック・アドバイジング・シラバスにみられるように、支援によってどのような学習成果が得られるのかを整理する方法がある。アドバイジングの成果を教職員が共有することで、組織的な支援の円滑化につながるとともに、学生をはじめとする関係者にも支援を受ける意義を伝えることができる。しかしながら、米国での支援がそのまま日本に適用できるわけではない。日本の大学の特徴を踏まえながら、学習計画支援のあり方を検討し、それぞれの大学に適した支援体制を構築していくことが重要である。

このように、履修選択の支援も含めた学習計画の支援は、個別対応にとどまらず、大学全体で取り組むべき重要な教育活動である。それは、学生が自ら目標を見出し、その達成に向けて学びを進めることを支える取組であり、スチューデント・サクセスの実現に寄与するものである。

（つづく）